

一同窓会名簿に載っていない 東大機械工学科卒の7人の理学士

東京大学、工学院大学名誉教授

大橋 秀雄 (昭和29年卒)



東大機械同窓会名簿を開くと、明治12年に工部大学校機械科を卒業した5人の第一回卒業生を筆頭に、機械工学およびその関連学科を卒業した方々の名前が連綿として続いている。われわれの元祖に当たる第一回卒業生については、昨年出版された同窓会名簿第60号（追補編）に「東大機械同窓会第一回卒業生 —5人の足跡を辿る—」と題した伝記を載せていただいた。お読みいただいた方もいらっしゃると思う。

その調査過程で、ふと気になることがあった。東京大学の卒業記録には機械工学科として掲載されている7人の卒業生が、機械同窓会名簿から漏れていることである。その方々は、明治19年の帝国大学発足以前に、その前身である東京大学の理学部工学科機械工学専修を卒業された理学士である。機械工学専修は、実質的に独立学科の扱いだったのか、理学部卒業生の区分では機械工学科となっている。

いかなる経緯で東大機械同窓会が会員を工学士に限定したか？ それを明らかにすることは難しいとしても、一つの事実として記録に留めるのが、この一文の目的である。

帝国大学は、帝国大学令にもとづいて明治19年3月に法医工文理の五つの分科大学を擁する国立総合大学として誕生した。工科大学は、工部大学校の流れと東京大学理学部の流れを合体して編成されたが、その系統をまとめたのが下の図である。



よく知られているように、明治6年に工部省は工業士官育成を目指す工学寮を開設し、明治10年工部大学校と改称したあと、明治12年に最初の卒業生を送り出した。工学士の始まりである。その後工科大学に合流するまでの7年度にわたり、機械科は計39人の卒業生を送り出した。その氏名は全員、東大機械同窓会名簿に工部大学校卒の注釈付で掲載されている。

一方文部省によって明治6年に創設された開成学校は、翌年東京開成学校と改称され、明治10年に発足した東京大学の法学部、文学部、理学部に引き継がれた。明治5年に開学した医学校は、明治7年東京医学校と改称し、東京大学には医学部として加わった。東京大学は4学部からなる総合大学で、文部省から法文理医の学士授与権が与えられた。

東京大学理学部には、数学、物理、化学、生物、星学、地質など理学部特有の学科に加え、工学科と採鉱冶金学科が設けられた。修業年限は4年で、工学科では3年までに数学、物理、機械図、物質強弱、冶金など工学の基礎知識を習得し、4年になって土木工学専修と機械工学専修に別れて専門を学んだ。工部大学校では予科2年は別にしても、専門科、実地科各2年の4年間、学科に別れてみっちり専門教育を受けたので、教育内容にはかなりの違いがあったと思われる。

明治18年、帝国大学が成立する前年、理学部工学科は他の工科系学科と一緒に新設された工芸学部に移り、翌年工部大学校と合併して帝国大学工科大学に移行した。明治19年に初の帝国大学機械工学科卒となった6名は、同窓会名簿には、元工部大学校生2名と元工芸学部生4名が別々に記載されている。

問題は、理学部工学科機械工学専修を卒業した7名の理学士である。すでに述べたように、大学の卒業記録¹では、例外なく機械工学科に区分されて記載されている。理学部には組織としての機械工学科は存在しなかったのに、どうしてこうなったのか？ 今では、学科は学部の下部組織という固定観念が染みついているが、昔は違っていたのだろう。科学の科が区分・分類を意味するように、文科・理科の科が単なる仕分けを示すように、機械工学科は、機械工学という専門分野も指したのだろう。そう考えると、機械工学科卒は、工学科卒という組織重視の表現より、実質を正確に伝えている。古い文書に現れる学科は、組織あるいは区分の広義に解釈しなければならない。

7人のお名前は、明治13年卒：阪田貞一、14年卒：吉田朋吉、九里^{くのり}（五代）龍作、15年卒：横井佐久治（佐久）、川上新太郎、田邊三男、16年卒：権田正三郎である（敬称略、以下同じ）。これらの方々のうち、1期生の阪田は、東京工業学校、東京高等工業学校（東工大の前身）の校長や機械学会第3代会長を務めるなど多くの業績を残した。2期生の九里は、工科大学機械工学科の発足と同時に教授に就任したが、半年で退官して鉱山経営の道に進んだ。その他の方々の略歴も、人名辞典などで追跡できる²。

明治18年12月22日、明治維新とともに始まった太政官制度が内閣制度に変わり、伊藤博文が初代内閣総理大臣に就任した。これにあわせ、工部省は廃止されて通信省と農商務省に分割・統合されたが、工部大学校は文部省に移管された。さらに、翌年3月2日公布の帝国大学令により、工科大学を含む五つの分科大学からなる帝国大学が成立することになっていたため、その準備が着々進められていた。

文部省としては、東京大学の理学部に含まれている工科系の学科を新設する工芸学部³に統合し、それに工部大学校を併合して工科大学として発足させる目論見だった。このため明治18年12月15日に工芸学

1 東京大学法理文三学部一覧、帝国大学一覧の各年度版など。ネットで閲覧できるものとしては、国立国会図書館 <http://www.ndl.go.jp/> でデジタル化資料となっている、前者の明治16-17年版（コマ番号128）、後者の昭和8年版（同365-366）などがある。

2 大日本博士録第5巻工学博士之部（発展社出版部、昭和5年発行）に阪田、吉田、五代（九里）、川上の4人、明治過去帳物故人名辞典（東京美術、昭和10年発行）に横井、権田の2人、新訂増補海を越えた日本人名事典（日外アソシエーツ、2005年発行）に阪田、吉田、五代、横井、川上の5人の経歴が載っている。横井、田邊の二人は、20台後半の若さで死去した。

部が設置され、理学部の工学科、採鉱冶金学科、応用化学科、付属の造船学科がこれに移行した。一方工部省が廃止されて、工部大学校は廃止、併合の岐路に立たされていた。当然ながら、学生や卒業生は猛烈に反発した。工部大学校を創立した山尾庸三、大鳥圭介に加え、官界有力者の渡辺洪基、言論人の福沢諭吉や福地源一郎などの理解・協力を得て、学生代表は明治19年1月、時の文部大臣森有禮に上申書を提出した。その中で、理学部は学術の真理を考究するのに対して、工部大学校では理論と実業を重視する違いを強調し、理学の研究と工業の盛大を期すには、工部大学校の廃止は、理学部の廃止と同様に、あってはならないと主張した。結局はこの主張が通り、両者が対等合併して工科大学を成立させることになった。渡辺洪基が、帝国大学初代総長に就任したことも、工部大学校にとって有利に働いたかも知れない。

工芸学部は僅か3ヶ月で役割を終え、翌年3月、古市公威を学長とする工科大学が発足した。その学科編成は、工部大学校と同じ土木、機械、造船、電気、造家、応用化学、採鉱冶金の7学科だったが、機械科が機械工学科に変わったように、すべての学科に学が付いて、理学の匂いが強まった。校舎は、本郷に工科大学の新校舎が完成する明治21年まで、虎ノ門の工部大学校が継続して使われた。

組織の統合には、理念や人事の調整でさまざまな問題が生じる。学科編成や設備については工部大学校が主導したが、人事は当然文部省系が有利だった。工科大学発足当初、学長の古市を筆頭に教授は11人、その中で工部大学卒は志田林三郎（電気、教頭心得）、三好晋六郎（造船）、辰野金吾（造家）の3人³に過ぎなかった。他はすべて東京大学、あるいはその前身校の卒業生だった。一方助教授については、7人中6人が工部大学校卒業生で、数年経つうちに、これらの若手が工科大学を牽引するようになった。

機械工学科についてみれば、発足時には、工部大学校以来引き続き外国人教師を勤めたC. D. Westに加え、南校卒の山田要吉、東京開成学校卒の谷口直真、理学部工学科卒の九里龍作が教授として教育に当たった。しかし5年以内にすべて退官、転任または死去し、その後は真野文二、井口在屋^{いのくちありや}など工部大学校卒業生のみが教育を担うようになった⁴。

工科大学になると修業年限は3年に減り、専門教育に特化するだけで、工部大学校の特色だった実地研修は大幅に減った。組織は合体しても、理学部流と工部大学校流の教育を融合させる上で、さまざまな困難と葛藤があったと推測できる。機械工学科卒の理学士が同窓会名簿から外れた一因は、この辺の事情にあったかも知れない。

工科大学機械工学科が発足してから127年の歳月が流れた。その間、人替わり、代を重ねて、多くの人たちが教育と研究を担ってきた。そのお一人お一人を頭に浮かべてみると、発想の根源が理学部的な方も工部大学校的な方もいらっしゃる。その混成が、実は組織の強みとして働いたのだろう。理工二つのルーツは、機械工学科のなかに生き続けているに違いない。

東大工学部では、いろいろな学科系列が独自の同窓会を作って名簿を刊行している。そのうち土木同窓会⁵、化学・生命系親和会、鉱山・冶金系同窓会は、機械同窓会とともに、理工合体の歴史を共有している。しかしいずれの同窓会も、理学部卒の理学士を会員として名簿に載せている。

3 教授就任予定だった高山直質（機械）は、工科大学発足直後の3月7日に死去した。詳しくは第一回卒業生の伝記参照。

4 工部大学校機械科を卒業して母校の助教授を勤めていた高山直質（第1回）、真野文二（第3回）、井口在屋（第4回）の3人は、引き続き工科大学機械工学科に任用された。高山は直後に病死し、真野は明治22年、井口は明治29年に教授に昇進した。なお明治34年教授就任の斯波忠三郎以降は、何れも工科大学機械工学科卒。

5 会則と沿革は <http://www.civil.t.u-tokyo.ac.jp/alumni/japanese/enkaku.html>

以上の調査に当たり、昨年に引き続き工2号館図書室の滝沢正順さんに多大のご協力をいただいた。しかし、7人の理学士が東大機械同窓会名簿から漏れた理由が、意図的だったのか、あるいは疎漏だったのか、今となっては知る手掛かりも得られなかった。名簿を動かし難い歴史と捉えれば、調査だけでお終いとなる。しかし、これを機械同窓会の著作と考えれば、改訂の余地が生まれる。

最後に、私の考えを述べさせていただこう。東大機械の歴史を振り返ると、東京大学理学部は、工部大学校と同様に正統なルーツである。現に、僅か3ヶ月形式的に在籍した工芸学部生が、われわれの先輩に加わっている。それなら、実質的に何も変わらない理学部機械工学科卒業生も、われわれの先輩に違いない。機械同窓会名簿の筆頭に、工部大学校卒の工学士と同列に、東京大学理学部卒の7人の理学士を加える。その方が、歴史により忠実である。そして、折角恵まれた二本の根を、しっかり伝えることができる。